

アッラーについての誤解（下）：月の神

説明： イスラーム以前のアラビア半島の宗教について。

より アイシャ ステイシー

掲載日時 04 May 2015 - 編集日時 04 May 2015

カテゴリ： [記事](#) > [イスラームの信条](#) > [神について](#)



誤った情報を教え込まれた人々は、アッラーは古代の「月の神」の現代的解釈であるとし、アッラーに対するそうした醜悪な解釈には、「預言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）がそうした神を復活させ、イスラーム宗教における中心とさせた」という根も葉もない主張がたびたび伴います。それは断じて真実とは異なります。アッラーとは唯一無比であり、最も慈悲深き御方です。そしてアッラーとはアブラハムが信じた神であり、モーゼが信じた神であり、イエスが信じた神なのです。

“ 誠にこれは、真実な物語である。アッラーの外に神はない。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。 ”（クルアーン3:62）

預言者アブラハム以前のアラブ人の宗教については殆ど知られていません。アラブ人たちが不正に偶像、天体、木々、石を崇拝していたことはほぼ間違いありませんし、そしてこれらの偶像には動物的特徴を持つものすらありました。また、アラビア半島で崇拝されていた神々の中には月と関連付けられる神もありましたが [1](#)、他の神々の上位にその月の神を崇拝したという証拠は何一つ残されていません。

その一方で、アラビア半島の全域において、太陽が女神として崇拝されていた証拠は残されています。太陽（シャムス）はアラブ人部族のいくつかによって崇敬され、祠や偶像が設けられていました。アブド シャムス（太陽のしもべ）という名は、アラビア半島の多くの地域で見出されています。北部ではアムリ シャムス（太陽の男）という名が一般的にあり、アブドゥ = シャルク（昇りのしもべ）は日の昇りを崇拝していたことの証です [2](#)。

預言者ムハンマドの叔父の一人の名はアブド シャムスでしたし、アブー フライラという愛称で知られる、ムスリム第一世代の著名なイスラーム学者の本名もそうでした。アブー フライラがイスラームに改宗した際、預言者ムハンマドは彼の名をアブドゥ = ラフマーン（最も慈悲深き御方のしもべ）と改名させました。

ムスリムたちは、創造の始まり以来、アッラーが人類を導き、教えを説くために諸使徒諸預言者を遣わしたことを一片の疑いなく信じています。それゆえ、人類にとっての元来の宗教はアッラーへの服従なのです。アラブ人たちも元々アッラーを崇拝していましたが、

時間の経過と共に彼らの崇拜は人の手によって作られた概念や迷信によって腐敗していきました。その理由は時間の経過と共に分からなくなってしまいました。おそらく彼らはノアの民が行っていたような偶像崇拜に陥ってしまったものと見られています。

預言者ノアの子孫は、アッラーの唯一性を信じるひとつの共同体だったものの、彼らに混乱と逸脱が忍び寄りました。

誠実な人々は、人々にアッラーへの義務を思い起こさせようとしていましたが、時間が経つとサタンは人々を堕落させる機会を見出しました。誠実な人々が死ぬと、サタンは彼らの業績を記念する彫像を打ち立てるよう人々に囁きかけました。

人々は公共の場や家々の中に彫像を造り、人々がそれらの彫像が造られた理由を忘れてしまうまでサタンは彼らを放っておきました。長年の月日が流れ、悪賢いサタンは人々の元に戻り、それらの彫像を直接崇拜するよう唆し始めました。預言者ムハンマドにまつわる真正の伝承には、以下のような偶像崇拜の起源を要約したのがあります。

“それら（偶像）の名は元来、ノアの民の時代の誠実な人々に由来していたものの、彼らの死後、サタンは公共の場に偶像を打ち立て、それらの名によって偶像に呼びかけるよう人々の心に吹き込んだ。人々はそれに従って（偶像を造る）たが、それらの偶像は（それを造った）人々が死に、偶像の起源がうやむやになるまで人々によって崇拜されることはなかった。” [3](#)

アブラハムの民と彼の息子イシュマエルがアッラーの聖殿（カアバ神殿 [4](#)）を再建した際、アラブ人の大半は二人に倣って唯一神への崇拜に戻りましたが、時代が下るにつれ、アラブ人たちは再び偶像崇拜という古い悪習に陥りました。預言者アブラハムと預言者ムハンマドの時代の間、アラビア半島の宗教は偶像崇拜に牛耳られていたという証拠が多く残っており、その事実には疑いようはありません。

それぞれの部族や家庭には刻み込まれた肖像や彫像があり、またアラブ人たちは、弓矢を使って未来を占い、偶像の名において動物を犠牲に捧げる儀式を行っていた占い師を信じていました。ノアの民の主要な偶像の数々は、サウジアラビアの都市ジェッダ周辺地域に埋蔵されていたのが発見され、アラブの諸部族に分配されたと言われています [5](#)。預言者ムハンマドがマッカに無血入城した際、カアバ神殿には360もの偶像が祀られていたとされています。

イスラーム以前のアラビア半島に存在していた偶像の中でも最もよく知られているものはマナート、アッ＝ラート、アル＝ウッザーです [6](#)。それらの偶像が月の神や月そのものと関連付けられる根拠は存在しません。アラブ人たちはそれらの偶像へと崇拜し、神への仲裁を呼びかけていました。アッラーはこうした偶像崇拜を非難しています。

“あなたがたは、アッ＝ラートとアル＝ウッザーを（何であると）考えるか。それから第3番目のマナートを。あなたがたには男子があり、かれには女子があるというのか。それでは、本当に不当な分け方であろう。それらは、あなたがたや祖先たちが名付けた（只の）名前に過ぎない。アッラーは（どんな）権威をも、それらに下されなかった。かれら（不信心者）は、虚しい臆測や私慾に従っているに過ぎない。既に主からの導きが、かれらに来ているのに。”（クルアーン53:19 – 23）

偶像崇拜 多神崇拜が蔓延していた中、イスラーム以前のアラブ人たちが月の神を最高

神として呼びかけていたということばかりか、実際に月の神に祈願をしたという証拠も残されてはいません。世代を超えても、彼らは全宇宙の究極なる支配者に対しての信仰を失うこと（大半の場合はアッラーについての誤った概念を抱いてはいたものの）はありませんでした。彼らはアッラーの祝福と懲罰、そして審判の日を信じていたのです。当時の詩人も、アッラーについてしばしば言及していました。

西暦5世紀の著名な詩人であるナビガはこう述べています。「私は宣誓の誓いをし、疑念の入り込む余地を与えなかった。なぜならアッラー以外に誰が人間を助けるというのか」またズハイル ブン アビー サルマはこう述べつつ審判の日への信仰を確証しています。「行いは巻物において記録され、審判の日に提示される。現世においても復讐をすることはできるのだ。」クルアーンも同様に、イスラーム以前のアラブ人たちは神であるアッラーが唯一であることを知っていたという事実を証言します。

“もしあなたがかれらに、「誰が天と地を創造し、太陽と月を服従させるか。」と問うならば、かれらは必ず「アッラー。」と言うであろう。それならどうしてかれらは迷い去るのか。アッラーは、御自分のしもべの中、御好みの者には糧を豊かに与え、また（そう望まれる）者には切り詰められる。本当にアッラーは、凡てのことを熟知なされる。もしあなたが、かれらに「誰が天から雨を降らせ、それで、死んでいる大地を甦らせるのか。」と、問うならば、かれらはきっと「アッラー。」と言うであろう。言え、「アッラーを讃えます」。だがかれらの多くは理解しない。”（クルアーン29:61 – 63）

脚注：

- [1](http://www.britannica.com/EBchecked/topic/31651/Arabian-religion/68308/Pre-Islamic-deities) <http://www.britannica.com/EBchecked/topic/31651/Arabian-religion/68308/Pre-Islamic-deities>
- [2](#) Encyclopaedia of Religion and Ethics, Article “ Ancient Arab ” , Vol. 1, p.
- [3](#) サヒーフ ブハーリー
- [4](#) サウジアラビアのマッカにある聖マスジドの中央に位置する立方体の建物。
- [5](#) Safi-ur-Rahman al-Mubarkpur, (2002) The Sealed Nectar, revised 2nd edition. Darussalam, Riyadh.
- [6](#) Hisham Ibn Al-Kalbi, Kitab al-Asnam, edited by Ahmad Zaki Pasha. (Cairo, 1927), pp. 9-14.

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2871>

Copyright © 2006-2013 www.IslamReligion.com. All rights reserved.